
仮面ライダーディジェンドー光へ導く者

カッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディエンドー光へ導く者

【Nコード】

N3765U

【作者名】

カッシー

【あらすじ】

平凡な仮面ライダーオタクの中学生風切竜斗はいつも通りぼーっとしていて、いつもの様に藤原春香に突っ込まれていた。そんな日常を覆すかのようにこの世界に滅びの現象が起こる。怪物達に追われてる途中にディケイドのベルトに似てるベルトを拾った。そのベルトから変身する覚悟と理由が出来た時風切竜斗は仮面ライダーディエンドーへと変身する

滅びの現象（前書き）

始めました！よろしくお願いします

滅びの現象

ここは平和な世界、そこに1人の中学生が……………

「あーあ、青春してーな」

……………一応いた。その少年の名前は風切竜斗、ごく平凡な中学生

「バカな事言ってんじゃないわよ」

その言葉に突っ込む少女の名前は藤原春香、こちらもごく平凡な中学生

「じゃあ、仮面ライダーになりたい！」

「はあ……………飽きれてものが言えない」

竜斗は重度の仮面ライダーオタクだった、この学校では確実にナンバー1だろう

「いきなり滅びの現象がおきたりしてね！」

「だからないって」

春香も一応、弟がいるので付き添いみたいな感じで見ていた

「お腹も空いたし」

「関係ない話でしょ！」

「ナイス突っ込みサンキュー！」

そんな機嫌が良い日、まあいつもの日常なのだが、次の瞬間日常は非日常に変わった

「アンタって思ったこと現実にする力あったっけ？」

春香がいきなり突拍子もない事を言い出した

「は？そんなどつかのラノベに出てくるような力は全く俺にはあり
m え？」

一瞬幻かと思ったがそれは現実に確かにあった。あのディケイドに出て来るような灰色の世界と世界を結ぶ扉が

「え？まさかの俺に思った事を現実にする力が芽生えた？おっしや
ー！！俺神じゃん」

そんなバカな事を言ってる竜斗を無視して春香は

「早く逃げるわよ」

「え？何で？」

その言葉に竜斗は疑問を持つ

「分からないの？！それはね、 仮面ライダーなんてで
て来てなくて、怪物ばっかし出てくるからよ！」

「へ？」

そつなのだ、全く仮面ライダーなどいなくて、怪物ばっかし出てくる

「え？こういう時ってディケイドとかが来て戦うんじゃないの？」

「全く仮面ライダーなんて出てくる気配ないわよ！」

と言って春香は竜斗を引っ張って逃げる全速力で

「痛い！痛いって！春香」

首根っこを引っ張られてるので、痛がる竜斗

「そんな事言ってる暇ないのよ！」

と言って逃げるが……………

「ちょっと待って春香！」

「何よ！」

止まって春香がいまにもキレてますって言う顔で止まる

「すげえよ！これ！新しいライダーベルトか？ディケイドのベルトに似てるけど……………」

止まった理由は、ベルトが落っこちてたからだった

「アンタ！そんな理由で止まるなんて、今どいう状況が分かってんの？」

「ゴメン、ゴメン」

「ゴメンじゃ済まされないわよう！追ってがきた！」

前にはクウガの世界のグロンギが後ろにはカブトの世界のワームが

「袋の鼠だ」

「あんたのせいだからね！」

「スイマセン」

「はぁ．．．．．しょうがないわね、アンタの大好きな仮面ライダーを見せてあげる」

は？と竜斗は首を傾げる

「こういう事よ！」

そういつて、春香はどこから出てきたのか見た事もないディエンドの銃のような物を取り出した

「へ？なに？どんな状況だこれ！」

春香は竜斗の言葉を無視して銃の手に持つ所にこれまたどこから出てきたのかカードを差し込む

「K A M E M R I D E」

と言う声と共に相手に向かって銃を向け

「」「変身!!」「」

「DEROOK!!」

と言う声と共に春香は黄色と青色の混じった戦士へと変身した

「ここは任せて!アンタは早く逃げて」

「う..うん」

頷いて自分の家へとにげた。逃げるしかなかった、情けない思いながら

「嘘だろ.....」

竜斗の目に映るのは崩壊した自分の家とその周り、ゴミしか見えない

「父さん!母さん!どこいったんだよ!!俺を1人にしてよ!」

誰も聞いてないのに叫ぶ、叫ぶしかなかった。その声を聞いたのか
アギトの世界のアンノウンが攻めて来る

「ヒトはヒトのままでいい.....」

そうアンノウンは言って頭の上の白い輪っかから剣を取り出す

「へへ、俺の人生はここまでか……………」

だんだんアンノウン達が近づいて来る

「春香、俺は女にまで庇ってもらって死ぬような運命だったんだな、情けないぜ」

春香には聞こえるわけがないのに、静かな声で話す竜斗

「じゃあな」

そう言ったあとアンノウンからの剣の攻撃

「うわっ！！！」

死んだはずだった。だが死んでなかった、恐る恐る目を開けるそこには……………

「諦めてんじゃないわよ！」

「……………春香」

仮面ライダーデイルックに変身した春香が立っていた。ボロボロの姿で

「大丈夫なのか？」

「ええこれくらい……………」

そう言ってカードを取り出すして銃に差し込む

「FINAL ATTACK RIDE
DI DI ROCK!!」

DI DI

「はぁ!!」

銃からレーザービームみたいなのが発射される。その攻撃を受けた
アンノウンは爆発した。

「良かった……」

緊張の糸が切れたのかそこで竜斗は倒れた

滅びの現象（後書き）

ついに始まりました！仮面ライダーディジェンド

「俺って助かるの？」（竜斗）

大丈夫！作者の文章力があれば

「作者の文章力って．．．．．ハア」（春香）

「ホントに助かるのかな．．．．．」（竜斗）

そんな訳で次は変身します！（多分ね）

「．．．次回もよろしく！」

変身（前書き）

2話目です！こっから竜斗視点になります

変身

「う…うーん」

「あ、目覚めた？」

俺が目を覚ますと目の前には春香がいた

「うつわー！ー！！」

「え？どうした」

「いやね、いきなり目の前にいたんだから、そりゃ驚くよ」

「その言い方はないでしょ！命の恩人だよ私は！」

その言葉で思い出した、いままでの事を

「どうなったの？あの仮面ライダーは？怪物は？皆は、家族は？」

あわてて聞くと春香は

「落ち着いて、竜斗」

取り乱していた事に自分は気づいた

「ごめん、いきなり」

「いいよ、誰だってみたら驚いたり取り乱したりする」

そう言って1呼吸整えて話した

「まず、あの仮面ライダーの正体だね。あの仮面ライダーはディケイドやディエンドと同じ種類の仮面ライダー、その名前は仮面ライダーディロック」

「仮面ライダーディロック……………」

こだまのように繰り返す

「うん、家族でドライブしてた時1人になった時があって、その時カメラ持ってる人がいきなり来て渡してくれたんだ「これはいずれお前に必要な力になる」って最初は疑ってたんだけどね」

もしかしてそれって…

「門矢土さんじゃないの？」

「へ？確かに……………だけど少し大きかったよ」

「へ〜」

門矢土さんじゃない？じゃあ誰が…

「次、ここは何処なのか」

「何処なの？」

「ここは…私の家よ」

「へ？」

え？ここは春香の家？えーこんなに少女っぽかったんだな。ぬいぐるみとか置いて

「ちょっと竜斗」

殺気が自分のもとへくるあれ？

「私が少女っぽかったんだなってどういう意味？」

「え？き…聞こえてたの？」

「ええ…バツチリね」

「すみませんホントにごめんなさ「死ね！」「死ねはないでしょ！」バキッボコッバシッドコッベシッ……………」

「まあ今日はこれくらいにしてあげよう」

「充分……………いた…いよ…し…ぬ」

「さあ話の続きね、ここはまだ安全だけど、もうそろそろここにもくる」

「え？」

「だから早く逃げるよ」

「逃げるって何処へ……………」

「そ…それは」

返答に困っていると外からバリンという音が

「来たわね」

「どうすんの？」

「あんたは裏口からにげなさい」

「私はここで足止めをするわ」

その答えに驚愕した

「何で？俺と一緒に逃げよう！」

そう言ってみるが

「ダメよ！私達一緒に逃げると絶対に2人ともやられる！」

「だからって、どうして俺にこだわるんだよ！」

「それは……………」

言いかけた時に電王の世界の怪物イマジンが現れた

「くっ！」

銃を出してカードを差し込む

「K A M E M R I D E」

「「「変身!」」」

「D E R O O K ! !」

その音と共に春香はディロックに変身する

「早く!」

「で．．．．．でも」

「早く逃げなさい! って言ってるでしょ!」

その声におどろき裏口まで走る

「じゃあね．．．．．」

その春香の声は聞き取れなかった。

自分は弱い。ヒーローになりたい! と思ってた。皆を守って助けたいと思っていた。それも全部無理だった。むしろ助けてもらっている。しかも、女子に。遠くから銃声が聞こえた、きつと春香が戦っているんだろう、皆を守りたい．．．．．いや、今は．．．．．そばにいる人を守りたい! 春香を助けたい!

その時バックが光だした。いやバックが光ってるんじゃない、バック

クの中の拾ったベルトが光ってるんだ！！すぐさまベルトを取り出す

「何だこれ？」

『ベルトの魂』

「ベルトの魂だと！」

そんな質問をベルトの魂は無視して話を続ける

『お前はベルトの力を欲しがっている』

「ベルトの力？」

『お前を監視していて気づいた、お前は今までの人間とは違う、目的がな』

「目的？」

『誰かを守りたいって言う目的だ』

「誰かを守りたい……………」

『さあベルトを取れ！お前ならできる！その覚悟がある！』

俺は迷わずに言った

「当たり前だ！」

そう言ってベルトを採った

「ハア．．．．ハア．．．．何体いんのよ」

春香の前には、アンノウンやグロング、ワームやアンデッドなど様々な世界の怪物がいた

「もう終わりね」

そう言って銃を落とす

「ヒトはヒトのままでいい．．．．」

アンノウンが春香に剣を振るい終わりにしようとしたが

「ちえいさー！ー！」

相手を蹴って飛ばす

「一回やってみたかったんだよーラノベの真似、自動販売機じゃないのが残念だけど

「ちよっあんなんでここに」

春香が聞く

「当たり前だろ！」

俺は自信満々に答えた

「守りたい奴を守りにきたただけだ！」

そう言っでベルトと1枚のカードを取った

「それって、逃げてた時の……」

ベルトを腰につけるそしてカードを差し込んだ

「『変身！』」

「K A M E M R I D E」

その声と共に、俺は両手でベルトを押す

「D E G E E N D E ! !」

そう言っでディケイドに似た赤色の戦士仮面ライダーディジェンド

が誕生した

「さあいくか！」

そう言って仮面ライダーVS怪物達の戦いが始まった

変身（後書き）

いやーここまで考えるの辛かった

「じゃあ2話も連続でやんなよ」（竜斗）

「そうよ！危ない所で終わってたし」（春香）

まあまあ、さあ次回はディジェンドVS怪物達！そして竜斗がフラグを……………ブハッ

「それ以上言うな！！」（春香）

「え？フラグがどうかしたか？」（竜斗）

「何でもないわよ！」（春香）

えー次もよろ…し……………

「あつ！作者が！まあ次回もお願いします！」（春香）

戦闘（前書き）

3話目です！

「おっ！ついに戦闘シーンか！」（竜斗）

それでは！どうぞ！

戦闘

「私もやる」

と言って落とした銃を拾おうとするが、足取りはフラフラ

「おいおい、大丈夫かよ。今度はこっちの番だお前はどっか隠れてる」

「う…うん」

（気のせいかな？竜斗の背中が大きく見える）

そう思う春香、だが今は逃げる方が先決だと思った。今じゃ足でまといになるだけだからだ

「絶対に帰ってきてね」

「当たり前だろ」

そう言つてライドブッカーに似たような道具からカードを取り出す

「さあ、お前らに友達を苦しめた罰を与えてあげよう」

カードを差し込む

「ATTACK RIDE」

「SLASH!!」

「はぁ……………」

デিজィエンドが出す強烈な威圧感に怪物達は少し退く

「でいやー!」

敵をどんどん切っていく。ほとんどの敵を1撃で倒した

「弱いなーしょうがない」

そう言っただけでもカードを取り出す。

「こいつでどう?」

「KAMEN RIDE」

「変身!」

「KUUGA!」

その音と共にデিজィエンドの体は仮面ライダークウガへと変身した

「せいやっ!」

どんどんパンチを繰り出していく。その攻撃力は確実に本来のクウガより強い

「FOAM RIDE」

パンチを当てながらカードを1枚いれた

「RIZING MAITY!!」

その声はクウガの姿を所々金色に変えていく

「知ってるか？この状態でマイティキックをすると……………」

「FINAL ATTACKRIDE」

カードを差し込みながら怪物達に話す

「めちゃくちゃ爆風が広いんだぜ」

「KU KU KU KUUGA」

「終わりだ怪物共」

そう言った後、構える。すると足から電撃が走る。そして走ってジャンプし、1体のグロンギに当てると爆風が起こり。全ての怪物は爆風に巻き込まれた

「終わったな」

そう言っ変身を解き春香のもとへ急いだ

「大丈夫か？春香？」

遠くから見ていた春香は疲れきっていた

「うん、大丈夫」

「そうか、そりゃ良かった、良かった」

と言ってニコツと笑った

「だ…大丈夫よ！／＼／」

その笑顔にドキツとする春香。そう、竜斗は……………

（私、竜斗の事、好きになっちゃったかもしれない）

あの美少女の春香にフラグを立ててしまった訳だ

「大丈夫か？体が熱いぞ」

そう言って竜斗が春香に顔を近づける

「心配しないで、私なら大丈夫だから」

「そうなのか？」

と言って顔を離した

「いい、今から説明する事はホントだから、信じてね」

いきなり春香は真剣な顔をする

「この世界全体で滅びの現象は起きている。多分もう残ってる人間も多くはない」

「え？じゃあどうするの？」

その素朴な疑問に春香は答える

「平行移動をするの」

「平行移動？」

「うん。この世界とは別のライダーがいる世界、多分そこももう滅びの現象が起きてる可能性がある。それを止めにいくの」

「へーどうやって？」

「「う」やってよー！」

そう言ってあの銃とカードを取り出し、手を繋ぐ

「WOULD RIDE」

「はあっ！」

「HAZAMA！！」

「うわっ！！」

突然の衝撃に驚く、その後2人は灰色に包まれ次の瞬間にはいなかった

「ここは、何処？」

光のある所で目が覚めた。どうやらベッドのようだが窓の外をみてみると、何もなくてただ荒地が広がっている

「春香は何処だろ？」

そう言つて部屋をでて、探した。

「最後の部屋はここなんだけど．．．．．とてつもない嫌な予感がするんだよな」

と言いながらも、もうここしか開けてないので開けて見る

「おーいはるk．．．．．」

そこに立っていたのは春香だった。しかし、裸で

「ア．．．．．アンタねえ．．．．．」

顔を真っ赤にして春香は怒っている

「えつとですね…これは不可抗力でして…．．．．．決して私のせいではございまゝ…」「さっさとどっかいけカ!!」「はいっ!!」

そう言うてにげだす竜斗

「あれ？普通ああいうパターンなら怒って何もかも投げつけられて気絶するパターンのはずなんだけど．．．．．まあいいか!」

地獄耳の春香はそれが聞こえてて、ボソッとつぶやいた

「好きになつた奴を気絶させる訳にはいかないよ」

完璧にフラグが立って「うるさいよ作者!」はいっ!

数分して春香が戻ってきた

「ホントにごめんなさい！」

竜斗が春香に土下座をする

「いいわよ別に、もう気にしてないし」

「ホントですか？ありがとうございます春香様！」

顔を上げて子供のように笑顔になる竜斗、不覚にもまたもや春香はドキッとしてしまった

（その笑顔は反則よ！）

そう心の中で叫ぶ春香だった

「ところで何処なの？ここ」

「ここは、次元の狭間、世界と世界の狭間よ」

「次元の狭間？なんでこんな所に？」

「『急がば回れ』よ、アンタも私も酷く疲れていたし。アンタは3日間寝てたしね」

「3日間も寝てたの？！」

「ええ私は数時間で起きたけどね」

「そうなんだごめんね、迷惑かけちゃって」

「だ．．．．．大丈夫よ別に」

寝顔が可愛かったとは春香も死んでも言えまい

「どうしてこんな所を春香は知ってるの？」

「分からない」

「分からない？」

その答えに疑問を持つ竜斗

「ええ、自分もよく分からないけど、自然にこれがいいな。思ったのよ」

「へー不思議だなー」

そんな事を言いながら、銃を見る

「ホントに似てるね、ディエンドの銃と」

「うん、違っのは色とかカードを差し込む場所とかだね」

まじまじと銃を見る

「そう言うアంతアのベルトだってディケイドのベルトに似てるわよね」

「そうだね、春香と同じ、色とカードの種類とか」

不思議そうに見る竜斗

「ところで何処いくの？」

「分からないわ」

「え？また分からないの？！」

分からない発言続出

「うん、私が操縦できるのはこの次元の狭間にくる事ができるだけ。もう1回引き金を引くと次は何処の世界に行くのかは全くの謎よ！もしかしたらライダーのいない世界とかにも行くかも……」

「え？春香言ってたじゃん。行くのはライダーの世界だって」

「ごめん、ゴメンその時は分からなかったから」

全く反省してない謝り方

「まあいいや、で引き金押していいの？」

「ダメ！まだ何も食べてないでしょ」

「確かに………腹の虫が暴れている」

そう言っ て竜斗は腹を触っ て確かめる

「さあ、用意してるからちやちやっ と食べちゃって!」

「マジで!」

テーブルに並ぶのはハンバーグなど美味しそうな物ばかり

「美味しいよ!これ!」

「ありがとう」

そんな会話をしながらちやちやっ と終わらせる

「いやゝうまかった、気づけばご飯お代わりしまくってたからな、お前いいお嫁さんになれると思うよ」

「お嫁さんって．．．．．そんな／＼／」

照れてる春香に全く気づかない竜斗

「お前ホントに大丈夫か顔赤いぞ?」

「大丈夫、大丈夫!さあ 最初の世界へ行くわよ!」

「ホントかな」

疑問を持つ竜斗に春香は

「早く来ないと置いてくよ」

「それだけは勘弁してください！」

そう言っつてすぐ近くなのにダッシュする竜斗

「さあ行くわよ。手繋いで」

「おう！」

そう言っつて手を繋ぐ

「準備完了ね、行くわよ」

「W O U L D R I D E」

「はっ！」

引き金を押す

「P A L L A B L E W O U L D ! ! ! !」

そして次の瞬間姿を消した

とある世界の日本の空港

「久しぶりだなこの空気！」

とある青年が懐かしい空気を大きく吸う

「まずはポレポレにでも行ってみるか」

そう言つて久しぶりに日本に帰ってきた青年はバイクを走らせた

戦闘（後書き）

お…終わった〜

「頑張ったな作者」（竜斗）

「すごい頑張ったと思うよ!」（春香）

ありがとう2人共……………

「だけど無駄な所多いんじゃないか」（竜斗）

そうなんだよね〜次元の狭間の話が余計に長くなっちゃって

「今度から無駄な所はなくすよーに」（竜斗）

了解です。さて次回はわかる人には分かるでしょう仮面ライダーk
……………くはっ

「ネタバレ禁止よ!」（春香）

なんか……………いつ…も…きぜ……………つして……………終わっ
て……………

「あーあ、気絶しちゃったよ。まあ次回は仮面ライダー紹介です！
よろしく!」（竜斗）

絶対にふくしゅ「死ね」
（春香）死ねはくね？！

ライダー&オリキャラ紹介(前書き)

今回は紹介です！

「「よろしく！」」(竜斗・春香)

ではどうぞー！

ライダー&オリキャラ紹介

まず主人公から

名前／風切竜斗

年齢／13歳

身長／156cm

体重／45kg

趣味／仮面ライダー！

好きな食べ物／ハンバーガー

嫌いな食べ物／茄子！

詳細／仮面ライダーディジェンドに変身できる唯一の人物。フラグがたまに立つ。

自分の世界では平凡に生きてたが、いきなりの滅びの現象により非日常に一変する。逃げてる途中に拾ったディジェンドドライブで変身して春香を助けた。ただいま世界を救うために（ライダーに会うためでもあるけど）春香と冒険中

仮面ライダーディジェンド／風切竜斗

身長／170cm

体重 / 55 kg

キック力 / 10 t

パンチ力 / 6 t

詳細 / 風切竜斗が変身する仮面ライダー、全体的に赤色で眼は水色。デイクイドより上の力を持ち、カードはデイクイドより多い。デイクイドのようにライダーは出せない。

道具 / デイクエンドドライバー

デイクエンドに変身するための道具。デイクイドドライバーに似てるが、色は黄色と赤色で、デイクイドのようにキバまでのライダーだけではなく、オーズまでのライダーが描かれている。まだ空きがあるので、他のライダーにも変身できる予定

武器 / デイクエンドケース・デイクエンドガン・デイクエンドブレイド

デイクエンドドライバーの右隣についているケース、このケースには全てのカードが入っていて、無限にカードを入れられる。このケースはデイクエンドと同じく、必要に応じてガンモード、ブレイドモードに変わる

藤原春香

年齢 / 13 歳

身長 / ヒミツ

体重 / ヒミツ

趣味 / ぬいぐるみとかで遊ぶこと

好きな事 / 料理をしたりする

好きな食べ物 / ご飯

嫌いな食べ物 / 特になし！

詳細 / 仮面ライダーディロックに変わる人物。此方も平凡に生きてたが、滅びの現象が起きたせいで非日常に一変してしまった。謎の人物にディロックガンをもらう。竜斗の事が好き。ちなみにすごく可愛い。性格的にツンデレとある事情でもう1つの人格が出来る

仮面ライダーディロック / 藤原春香

身長 / 169 cm

体重 / ヒミツ

キック力 / 8 t

パンチ力 / 4 t

詳細ノディロックガンで変身する仮面ライダー。ディエンドより強いが近距離攻撃が苦手、ディジェンドとは違い、ガンからライダーを出す。

道具ノディロックガン

変身道具、変身前でも発射出来る。ディエンドのガンとは違い、持つ部分にカードを入れられる。最高は5枚。海東曰く「僕の銃よりお宝だね」

ライダー&オリキャラ紹介(後書き)

はぁ〜終わった〜

「お疲れです」(春香)

あれ？今日は竜斗は来てないの？

「新しい世界に来て喜びまくってっいて」(春香)

流石仮面ライダーオタク！子供だね

「そんな所も可愛いかも……」(春香)

あーあ春香がとろけた、じゃあ次回から本偏に戻りますんで、次回もよろしく！

『世界』（前書き）

題名考えるの苦労したわ……

「題名に苦労すんなよ」（竜斗）

ごめん、ごめん、では始まります！

『世界』

「痛っ！」

いきなりの世界移動に尻もちをつく竜斗

「大丈夫？ついたよ」

「おお！マジか！おっしゃ！ここ何処の世界？キバ？カブト？アギト？」

尻もちをついた事など忘れてはしゃぐ竜斗

「仮面ライダーオタクだね……」

とか言いながらも、可愛いなとか思ったりする春香

「さあいこう！待ってても始まらない！」

と言って歩き出した

「あ！ちよつと待って！」

そう言っただけ追いかける春香は竜斗の変わった所を見つける

「あれ？服装が……」

その疑問に竜斗は振り向く

「ふっふっふ、やっと気づいたのかい？仮面ライダーディケイドは世界を移動する時、服装が変わるのさ！」

「その服装は…警察官？」

「そのとおり！」

そういつた瞬間春香が笑いだす

「アンタが警察官？似合わないーいー！」

「だからって笑うなよ！」

「あんたあれよ！ハーフボイルドの探偵がハードボイルドになるより難しいわよ！その印象じゃ！」

「どこの仮面ライダーの話をしてるんだよ……ハア」

とある探偵事務所

「クシュン！」

「どうしたんだい？翔太郎」

「いや……風邪もひいてないのにくしゃみしちゃったぜ」

「それは誰かが翔太郎の噂をしてるからじゃないか？」

「噂って？」

「例えば……ハーフボイルドの話とか」

「フィリップ！俺はハーフボイルドじゃねえ！ハードボイルドだ！」

探偵の怒鳴りこえがとある街に響いた……

「ずっとお前笑い続けてるな」

一方、竜斗達は、何かキーワードを探すために歩いていたのだが

「だって……面白いんだもん」

「ハア……あれ？この幼稚園」

竜斗が何かに気づいたのかその幼稚園に近づく

「どうしたの？竜斗」

「すげえ！分かったよこの世界がどこの世界か！」

「分かったの！」

「ああ！ここは……ちょっと待ってて」

大事な所で止める竜斗、そして幼稚園に入っていく

「すみませーん」

とある女性にこえをかけた

「はい？何でしょう？」

「あの……喫茶店ポレポレを知ってませんかね」

「ああ……ポレポレなら……」

そう言って丁寧に説明して行く

「ありがとうございます」

「いや、大丈夫です」

そう言って立ち去ろうとすると

「みのりせんせーこの人だれ？」

幼稚園児が話しかけて来た

「えっと……この人は」

そう言って戸惑って居ると

「俺は正義のヒーローだ！」

そう竜斗は言っていると幼稚園児は眼を輝かせ

「ホント？じゃあみかくにんせいめいたいも倒せるのー？」

「ああ当たり前だろ！」

そう言って去って行って春香の所に戻る

「この世界に確信が持てた」

「で？この世界は本当に何なの？」

春香が答えを聞く

「この世界は………クウガの世界だ」

「へ」

そう言うだけであまり関心を示さない春香

「おい！さっきあんなに聞きたがってたのに、その反応はないだろ
」

「だっていざとなつて聞いたら、へーそうなのぐらいにしか感じられなかったから」

「ほー、そうかい」

そう言うって仮面ライダーオタクとしての怒りをあらわにするが、その時

『番組の途中ですが、ニユースをお伝えします。東京都葛飾区に未確認生命体46号だと思われませんがこの未確認生命体4号以外は未確認生命体4号に倒されており、一体なぜまた未確認……』

「行ってくる」

「え？私も行く」

と言って追うとするが

「ダメだ、仮面ライダーオタクを怒らせた罪によって、ここにいる判決をここに下す」

「え？そんな罪あんの？」

「俺の辞書に載ってたんだよ」

「嘘つけ……ハア、まあいいや絶対に帰ってこいよ」

「分かってるって」

そう言って走り出した見送ってる春香は

「好きな人のお願いを断るわけにはいかない。ってね」

そう呟いた

「くそ！何でまた未確認がいるんだ！」

長野県警の一条薫は銃弾を撃ちながら叫ぶ

「グシャアアアア」

「ちくしょう！こんな時に五代が居てくれればな！」

「ダメです一条さん！もうもちません！」

「もう終わりか……」

どんどん倒されて行く警察官達、もう一条しかない！その時

「だっ！！」

「グハッ！」

いきなり不意撃ちをくらわすとグロンギは10m程吹き飛んだ

「五代か！」

そう言って振り向くがそこにいたのは竜斗だった

「君！こんな所に入って来ちゃダメだ！」

「間に合って良かった！大丈夫ですか？」

一条の言葉を見殺してドライバーを腰につけるカードを差し込む

「『変身!!』『』」

「KAMEN RIDE」

「何だ？あのベルトは？」

「DEGEENT!!！」

その音で竜斗は仮面ライダーディジェントへ変身した

「何だ？あれは！新手の未確認か？」

「未確認じゃないですよ！」

と言ってゴ・ガトル・バに攻撃を仕掛けるが

「何だこれ？びくともしねえ！」

ちゃんと腹に入っただはずなのに、びくともしないゴ・ガトル・バ

「グシャアアアア」

反撃をされて飛ばされるディジェント

「痛い！何すんだよ！しょうがねえな！」

そう言ってカードを取り出し差し込む

「『変身!!』『』」

「KAMEN RIDE」

「OOO!!」

「変わった?」

一条はその異様な風景に驚く

「TA・TO・BA・TATOB A・TA・TO・BA」

音と共にディジェントはオーズへと変身した

「グガアアアアア」

「まるで狂ってるみたいだな」

そう言いながら除ける

「セイヤツ!」

腹をけるしかしビクともしない

「グガア」

「うわぁ!!」

またもや飛ばされる

「いってーな。仕方ねえビクともしないからな」

そう言ってカードを差し込む

「FOAM RIDE」

「SAGOOZOO!!」

「サゴーズ サゴーズ!!」

「またもや変わった!」

一条が口を開けたままにしてる

「セイヤー!!」

サゴーズコンボへとフォームチェンジし鉄のゴリラのような手で相手を殴る

「グガア」

少し後ろへ退く

「おっ!反応あり?」

そう言ってカードを差し込む

「FINAL ATTACK RIDE」

「終わりだグロンギ」

「oooooooo!!」

オーズが飛んだそして

「セイヤーーーー!!」

降りて来た衝撃波でサゴーズコンボの必殺技サゴーズインパクトが放たれる。だが……

「ウガアアアアア」

あと少しの所で逃げて行ってしまった

「ちくしょう!あとちよつとだったのに……」

そう言いながら変身を解いた

「君は何者なんだい?」

一条が竜斗に近づく

「俺は世界を旅する者ですよろしく、一条さん」

カッコつけた事にガッツポーズを心の中にする

「世界を旅する者?そして何で名前を……まあいい、ちよつと来てくれないかい」

「何処に行くんですか?」

「その喫茶店だ」

一条の指が指す方向には喫茶店ポレポレと書いてあった看板があった

『世界』（後書き）

疲れた〜

「今回私の出番少なかったね」（春香）

ごめんなさい！

「いいじゃないか！」（竜斗）

「あんたは変身してるからじゃない！」

「そうだけどね！」

まあまあ、次の話はついに主役登場です！ぜひ！

「「「次もよろしく！」」「」

『雄介』（前書き）

今回主役登場です！

「おっ！ついに雄介さんがくるのか！」

それでは始まります！

『雄介』

「いらつしゃい、ってコート着たハンサムさんじゃないか、その子は誰だい？」

「おーすげえ！ポレポレだ本物のポレポレだよばい！」

そう言つて竜斗が騒いでると

「うるさい、近所迷惑」

「え？春香がなんでいるの？」

そこには春香が居た

「アンタ、絶対に戻つてこないと思ったから連れて来てもらった。だいたいアンタ今ここにいるじゃん」

「ごめんなさい、ってか誰に連れて来てもらったの？」

「私です！」

と言つて幼稚園の先生――五代みのりはこたえる

「あー幼稚園の先生じゃないですか」

必死に竜斗は五代みのりと答えたい気持ちを抑えて答える

「あ、カレーください」

座った竜斗はおやつさんにカレーを頼む

「カレーね、かしこまりました」

と言う声を聞いてよっしゃと心の中でガッツポーズする竜斗

「五代は来るんですか？」

一条の質問に五代みのりは答える

「はい、お兄ちゃんからさっき電話が来て後、数十分で来るかと」

「そうか、ありがとう」

「ところで俺は何しに来たんですか？」

カレーを食べながら竜斗は一条に質問する

「五代が来てから質問しようと思ったんだがいいだろ、君は何者だい？」

「えっと、俺はですね違う世界から来ました」

「違う世界から？どういうことだ？」

「えっとですね、パラレルワールドと言うのをご存知でしょうか」

「ああ、同じ時間に存在するいくつものもしもの世界だろ？」

一条が竜斗の質問にこたえる

「その通りです。僕とそこにいる春香は世界の崩壊を食い止めようと世界を旅してるんです。ここが最初の世界」

「そうなのか……」

「2つ目の質問の答え、俺は仮面ライダーです」

「かめんらいだー？」

みのりが疑問のように聞く

「ええ、クウガと同じですよ」

「クウガを知ってるのか？」

「当たり前ですよ。俺の居た世界では仮面ライダーが特撮として放送されてたんですよ。クウガはその一作目です」

「世界は広いんだな」

などと呑気に答えるおやつさんを除き一同が愕然としているその時

「ゴメン！遅れた！」

その声一同が振り返るそこには

「お兄ちゃん！」

「雄介！」

「五代！」

そこには仮面ライダークウガ変身者——五代雄介がいた

「五代さんだ！すげえ！初めてだわ主役登場！こんなに感激出来るなんてな〜全国の仮面ライダーファンよ！羨ましいだろう！」

などとポレポレに來た時以上に騒いでる

「アンタはちよつと以上よ……」

と春香に白い目で見られる竜斗

「あの……一条さん、誰ですか？あの人」

と言つて雄介は竜斗達を指で指す

「えつと一言では説明できないのだが」

と言つて返答に困つていと

「俺は風切竜斗です、別の世界から來ました！あなたのいや、五代雄介さんの大ファンです！」

「私は藤原春香です」

と言つて2人共自己紹介をする

「え？俺の大ファン？別の世界？なんで俺の名前を？」

次々に疑問が浮かび上がる雄介

「それはですね…」

そう言つて一条達に説明した事をもう一度説明する

「へー世界って広いなー」

と、おやつさんと同じ反応をした

「しかし久しぶりだな、五代！」

「はい、久しぶりに帰つて来ました！」

と会話をしている時1本の電話が

「はい、オリエンタルな味と香りのつて警察の人？……はい、分かりました。でんわだよ」

そう言つて一条に電話を渡す

「はい、一条です……はい、分かりました」

電話を切る

「五代久しぶりの未確認だ、行くぞ」

「え？未確認つて俺が倒したはずじゃ……」

「また、で始めたんだとにかく行くぞ！」

と言ってでて行った

「俺たちもいくぞ！春香」

「うん！」

と言って外にでた

「でもどうすんの？私達バイク持ってないよ。外にあるのが1台」

「1台するんだよ」

と言ってベルトだけ取り出しカードを差し込む

「ATTACK RIDE」

「え？何するき？」

「AUTO BZIN!!」

バイクがすぐさまファイズのバイクオートバジンに変わる「

「乗れ！早く」

「う、うん」

そう言って乗った

「けど大丈夫なの？ 乗り方」

「俺も分からん！！」

「え？」

その春香の声と共にバイクが走り出すが……

「なんでそんな抱きつくんだよ！」

「なんか、怖いから！」

「そんな理由で抱きつくな！」

とか言いながらちょっと嬉しい竜斗そのまま未確認生命体のもとへと向かった

その時五代は……

「五代！敵は何体いるか分からないそうだ！気を付けろ！」

「分かりました！」

そう言つて雄介はバイクに乗つたまま

「「「変身！！」」」

その声で雄介はクウガに変身した

「行つて来ます！一条さん！」

そう言つて一条とは別の方向に走るその後

「だからそんな抱きつくなくて」

「嫌だ！」

「子供か？お前は！」

そんな口争いをしつつ竜斗はバイクを走らせていた

「くっ！」

「もっと僕を楽しませてよクウガ」

「リントは我らにひれ伏すのだ！」

ライジングマイティになったクウガのライジングマイティキックでも歯がたたない奴らばかり出てくる

「何処からこんなにたくさん……」

そう、どこからともなく敵は出現する。このままたおしてもキリがない

「待てよ」

竜斗の声が聞こえる

「「「変身!!」「」「」

「KAMEN RIDE」

「KAMEN RIDE」

「「「変身!!」「」「」

「DEROCK」

「DEGEENT」

「よっしゃ〜!」

「えへへ〜」

春香はまだ抱きついていた余韻に浸っていた

「ほら、春香さっさとやるぞ」

「はいはい、しかし多いね」

「しょうがないんじゃない」

「そりゃそうだ」

といってクウガに駆け寄る

「君たちはポレポレに居た……」

「大丈夫ですか？」

ディジェンドが声をかける

「まあ、なんとか……」

といって立ち上がった

「超変身!!」

そう言つてクウガはタイタンフォームに変身した

「変身!!」

「KAMEN RIDE」

「DOUBLE!!」

その音でディジェンドはダブルへと変わる

「よっしゃー行くか!!」

二度もよっしゃーと言つディジェンド

「はい、これどうぞ」

と言ってクウガにディジェンドのベルトについでる剣を渡した

「ありがとう」

そう言ってタイタンソードに変える

「はっ！」

タイタンソードの斬撃音が響く

『雄介』（後書き）

やっと勝負までいった……

「これが最後じゃないんでしょ！」（春香）

「俺をもっと活躍させろよ！」（竜斗）

次活躍すると思う

「思いつてなんだよ思いつて」（竜斗）

まあまあじゃあつぎもよろしく！

『戦闘』

クウガside

「はっ！」

クウガはタイタンフォームからライジングタイタンへと変わって敵を倒して行くが余りにも減らない

「クソッ！どうしてこんなにグロンギがいるんだ！」

「もっと楽しませてよクウガ」

ついには究極の闇まで出て来てしまう

「何でお前みたいな奴が復活してるんだ！」

「あの人がいるからだよ！」

「あの人？」

「そうだ！そしてあの方が究極を超えた究極の闇！」

「なっ！お前は」

不意に現れた敵にクウガは驚く

「もう一人のクウガだ！！」

そう、クウガが立っていたのだグロンギと共に

「もう一人の……俺か」

クウガは呟いた

ディジエンドside

「はっ！」

ディロックと別れたディジエンドは総勢百体程のグロンギ達に囲まれていた

「無茶苦茶多い！しかし、やり応えがある！」

「FORM RIDE」

「DOUBLE! LUNA TRIGGER!!」

その声と共にディジェンドは緑と紫から青と黄色の戦士に変わる。
そして胸にあるトリガー専用武器『トリガーマグナム』を外して相
手に放つ

「無駄だ！何処までも追いかけて行くぜ！」

逃げようとしたグロンギに全てが当たる

「くっ！」

だが倒れた訳ではなかった

「立ちやがった！頑丈な奴！」

グロンギが立ち上がったと同時に全てのグロンギが襲いかかってくる

「ATTACK RIDE」

それと同時に一枚のカードを差し込んだ

「FRY!!!」

今までなかった羽のような物が現れ、飛んだ

「驚いたろ！実は俺も驚いた」

実際には焦ったディジェンドがたまたま差し込んだカードがこのカードだった訳だった

「ルナトリガーゴールドエクストリームな感じだな。羽と体の色は違うけど」

そんな事をつぶやくお気楽なディジェンド

「FINAL ATTACK RIDE」

「トリガー……」

引き金を引きながら……

「DO DO DO DOUBLE!!」

「フルバースト!!」

引き金を押した瞬間全てのグロウギに銃の攻撃が放たれる

「ガハア」

殆んど怪物が爆発して残りはもう数体しか残っていないく、その残りも瀕死状態だったその残りもディジェンドガンで終わらせる

「よし、こんくらいでいいだろ。五代さんといこう」

ダッシュでクウガのもとへ向かった

ディロック side

「やけに数が多いわね、ゲゲルって一人でやるんじゃないかって」
ディロックの周りにも百体程のグロンギが囲んでいた

「近距離は苦手だから……カードに頼むか！」

そう言ってカードを五枚取り出して全てを銃の弾薬をいれる場所に差し込む

「KAMEN RIDE」

「頼むわよ」

「AGITO・SKULL・RYUKI・FIZE・OOO!!!」

規則性の全くないライダー達が出て来て構える

「行つてらっしゃい」

そう言つてグロンギ達に突っ込んで行くライダー達、ディロックは少し離れた場所に移動して銃で撃つが

「全く減らないわね」

頑丈なのか何なのか全く倒れそうにないグロンギ達、

「じゃあすぐ終わらせてあげる」

「ATTACK RIDE」

「CROSS ATTACK」

このカードを差し込んだ途端に召喚したライダー達が全てそれぞれの必殺技を放った

「グハア!!」

グロンギ達がどんどん倒れて行く。流石に頑丈であれ必殺技ではもたなかったのだろう。だが

「まだ残りがいるの?」

そう、必殺技で、ダメージを喰らったが、残ってる怪人達がいた

「しょうがないわね、ライダー達もいないし……やってみよ!」

何をするのか、ディロックはカードを差し込んだ

「FINAL ATTACK RIDE」

銃を相手に向けると全ての敵に照準が定まりグロンギ達は身動きが出来なくなってしまった

「ロック……」

「DE DE DE DEROCK!」

その声と同時に引き金を引いて叫んだ

「レーザー!!!!!!」

銃からグロンギのもとへ赤色のレーザーが発射されてすぐさま爆発した

「ふう、五代さん大丈夫かな?行ってみよ」

そしてすぐさまクウガのもとへ向かったのだった

『戦闘』（後書き）

今回戦闘シーンだけだったね（春香）

おい作者！（竜斗）

なんだよ

なんで春香は必殺技が出て俺の必殺技が出ないんだよ！（竜斗）

大丈夫、大丈夫！次出るから

ホントに！（竜斗）

凄くかつこ悪いけど（ボソッ）

聞こえてんぞ！（竜斗）

このままだとラチがあかないのでそろそろ終わりにします。では！
！次回はついに謎のクウガ登場です！

気になるね（春香）

では！

無視すんじゃないー！！！！（竜斗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3765u/>

仮面ライダーディジェンドー光へ導く者

2011年10月9日07時33分発行